

# 第6室 書跡—古代インドと日本の古經典—

## N-8-1 梵本心經並びに尊勝陀羅尼（ぼんぼんしんぎょうならびにそんしょうだらに）

ターラ樹の葉を乾燥させ、両端を切り、横に界線の罫（けい）をほどこし、「般若心經」と「仏頂尊勝陀羅尼」を梵字で記した貝葉經（ばいようきょう）です。古代インドでは、紙が定着する以前に、ターラ樹の葉を用いた貝葉写本が盛行しました。この貝葉經は、最も古い部類に属するものとして重要視されます。

## N-8附属 訳經記（やくきょうき）

江戸・湯島に靈雲寺を開いた真言宗の僧である浄厳（じょうごん、1639～1702）は、悉曇（しつたん、梵字・梵語に関する学問）学者として知られ、梵学に優れていました。この訳經記は、元禄7年(1694)に、浄厳が法隆寺伝来の梵字の貝葉經（ばいようきょう）二葉、「般若心經」と「仏頂尊勝陀羅尼」を写しとり、朱点や句義を注記し、あわせてあとがきを書き記したものです。

## N-11 賢愚經断簡（大聖武）（けんぐきょうだんかん おおじょうむ）

この写經は、13巻本『賢愚經』巻第五の沙弥守戒自殺品第二十三に相当する断簡です。筆者は聖武天皇と伝えますが自筆ではありません。写經のなかで最も雄大かつ力強い書風で、“大聖武”の異名があります。

## N-14 仏名經（ぶつみょうきょう）

『仏名經』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号を受け入れて覚えておくことを説いた經典です。この仏名經は過去、現在、未来の3巻に構成され、それぞれ千の仏名をあげています。各巻の奥書により、永治元年（1141）に五師隆慶（ごしりゅうけい）が先師・林幸大師（りんこうたいし）の一周忌を供養し、同時に仏名会（ぶつみょうえ）を催して、この經を施入したことがわかります。

## 第6室 染織—絹傘と古代の天蓋—

染織の展示は、法隆寺に伝来した「絹傘」「織物天蓋残欠」を中心に堂内荘厳に用いられた天蓋（てんがい）を展示しています。天蓋とは、古代インドの日傘に由来する荘厳具です。高貴な人々を暑さから守るため差し掛けた日傘は、やがて高貴な人物の目印となりました。このため、仏教においては仏像の頭上に天蓋を表わします。

古代の寺院では他に高僧（こうそう）の頭上や灌頂幡（かんじょうばん）とよばれる特別な旗の頂上にも傘を表わしました。その素材は絹織物のほか、金銅や木など多様なものがあります。ここでは法隆寺と正倉院に伝えられた織物の天蓋残欠（断片）を展示し、飛鳥時代から奈良時代にかけての変化を見ていきたいと思えます。

### N-319-26 織物天蓋残欠（おりものてんがいざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

天蓋の周囲に垂れる飾り幕が残ったものです。襷をたたんだ幕の上には「蛇舌（じゃぜつ）」と呼ばれる二等辺三角形の飾りがついています。綾織物に表わされた葡萄唐草文や双竜唐草円文（唐草の一部のみ見えています）はいずれも大柄で、中国唐時代の大陸的な雰囲気漂わせています。

### I-336-30・31 赤地葡萄唐草文綾天蓋垂飾（あかじぶどうからくさもんあやてんがいすいしょく）飛鳥～奈良時代・7～8世紀

織物天蓋残欠（N-319-26）に見られるのと同様の蛇舌です。飛鳥から奈良時代にかけての蛇舌をみると、鋭角的な二等辺三角形が徐々に鈍角となり、やがてU字形になっていく特徴があります。

### I-337-51 赤茶地震襷鳥文藤纈平絹天蓋垂飾（あかぢあじかすみだすきとりもんろうけちへいけんてんがいすいしょく）奈良時代・8世紀（正倉院伝来）

ここから先は、奈良の正倉院に伝えられた天蓋垂飾（蛇舌）の断片です。全体にU字形となり、周囲には錦の縁取りが施されています。溶かした蠟を型につけ、スタンプした後に染め上げる藤纈（ろうけち）とよばれる技法で、襷文（たすきもん）のうちに鳥が飛び交う様子が表わされています。飛鳥時代の遺品に藤纈は見られず、奈良時代らしい特色が表われています。

**I-337-166・167 黄地唐花文錦天蓋垂飾（きじからはなもんにしきてんがいすいしよく）奈良時代・8世紀（正倉院伝来）**

それぞれ異なる唐花文（からはなもん）が織り出された錦でつくられた蛇舌の断片です。蓮の花などを基本形として円形にまとめた文様を唐花と呼び、中国唐時代に流行しました。日本では奈良時代にこの文様もたらされ、織物のほか、漆工芸や仏像の彩色にも用いられています。上方には針穴が残っており、本来天蓋に縫い込まれていたことがわかります。

**I-337-231 紫地花鳥連珠七宝繫文錦天蓋垂飾（むらさきじかちょうれんじゅしっぽうつなぎもんにしきてんがいすいしよく）奈良時代・8世紀（正倉院伝来）**

七宝繫（しっぽうつなぎ）とよばれる円形を互い違いに組み合わせた形のなかに花や鳥の文様が表わされています。鳥は花の周囲を囲むように表わされており、平安時代以降、宮廷の装束（しょうぞく）に多く用いられることとなる鳥襷模様（とりだすきもよう）の先駆けをなす形を示している点で興味深い作品です。

**I-337-232 白茶地唐花文錦天蓋垂飾（しろちゃじからはなもんにしきてんがいすいしよく）奈良時代・8世紀（正倉院伝来）**

二種類の唐花文を互の目（ぐのめ）に配した錦を用いた蛇舌の断片。花卉の部分をよくみると、濃い緑と薄い緑で濃淡が表わされるなど、繊細な技法を見ることができます。また白や紫、緑などを重ね合わせた色彩は纏縷彩色（うんげんさいしき）と呼ばれるもので、中国唐時代の美術の影響を色濃く受けた、奈良時代から平安時代初期の美術工芸品にもしばしば見られます。

**N-31 絹傘（きぬがさ）奈良時代・8世紀**

聖徳太子の傘と伝えられている作品です。鮮やかな赤色に染められた三枚の絹を縫い合わせ、正方形に近い形としています。本来は中央の穴に軸木を通し、そこから四方に腕木を伸ばして、そこにこの絹傘を張って用いました。今日の傘のように、軸木は下にむけて伸びるようなものでなく、天井から吊り下げて用いたものです。